



気仙沼市観光キャラクター
「海の子 ホヤぼーや」

検査室からの お知らせ

No.19
2020.5.15
発行：気仙沼市医師会
臨床検査センター検査室

今回のテーマ

ALP・LD（IFCC法）

～JSCC法との相違点～

生化学的検査の測定項目について、一般社団法人日本臨床化学会（Japanese Society of Clinical Chemistry）が定めた測定法「JSCC法」が国内の99%の施設で採用されています。しかし、国際的には、国際臨床化学連盟の定めによる「IFCC法」が主流となっており、「ALP」と「LD」においてはJSCC法と相違点があることから2020年度内に「IFCC法」へ変更することが決定されました。

近年、グローバルハーモナイゼーション（国際的調和）の必要性が強く求められており、治験など臨床検査データが国際的に利用されるようになります。

ALP（アルカリフォスファターゼ）

1. 血液型による反応性

B型とO型（分泌型）の人は、脂肪食摂食後に小腸型ALPが上昇するため、JSCC法では偽高値を示していた。→IFCC法は血液型による違いはなし。

2. アイソザイムの反応性（食事、妊娠、出産による影響）

胎盤型 JSCC < IFCC 小腸型 JSCC > IFCC

3. 基準範囲

測定値は、JSCC法の約1/3となるため変更となります。

JCCLS共用基準範囲の採用

LD（LDH）

1. アイソザイムの反応性

肝疾患でLD5が優位 JSCC > IFCC

2. 基準範囲

JCCLS共用基準範囲の採用（従来より変更）

小児

ALP：1歳から思春期前期まで高値（3～4倍）、思春期のピークでは約4～6倍

LD：新生児期に高値（約1.8倍）、その後漸減し、思春期以降は成人値

採血後の注意点

ALP、LDは酵素の失活が速い項目です。

当日中に提出して下さい。



～ALP換算式～

（JSCC法をx、IFCC法をyとする）

JSCC法をIFCC法に換算

$$y = 0.35x$$

IFCC法をJSCC法に換算

$$x = 2.84y$$

※LDの換算式はありません。